

満洲から引き揚げて — 関彬夫さんの証言 —

現在の中国で「満州」という文字は死語に等しい。満洲とは清朝時代(1616～1912)中国の東北、東三省(遼寧省＝瀋陽、吉林省、黒竜江省)の地方を一括して指します。日本の関東軍は全満洲をほぼ占領し終わると、新国家樹立を急ピッチで進めました。そして1932年3月1日満洲国が成立し、その首都を新京(現長春)と決定しました。日本の国会での承認は同年9月13日と6ヶ月ずれています。その原因の詳細は後ほど機会があれば、ご報告いたしたいと思います。首都が決定されると空前の建設ラッシュ工事が開始されます。関東軍は1931年9月18日午後10時20分満洲鉄道に用意した爆薬を仕掛け、点火し爆発させ、爆音を合図に、待機していた川島大尉が105名の部下を率いて中国兵を射撃した。これが満州事変の発端となり15年戦争の発火点となった。柳条湖事件はこうして引き起こされた。

そういう中で1938年9月5日新京市にある病院で私は長男として出生しました。そして、満州基督新京キリスト教会で秋保牧師によって乳児洗礼を授けました。父親は横浜高等工業専門学校を卒業し、当時のゼネコンに就職、渡満し設計技師として活動しました。冬の気温はマイナス十数度以下になり水道管が破裂して家屋の周囲はスケートリンク場になりました。手袋をしていても手がちぢみ上がり、幼稚園から家に帰り、ぬるま湯に手指を入れると凄く痛く、今でもその痛みは忘れる事は出来ません。その頃、毛沢東率いる中共軍と蒋介石率いる中国軍との内戦が始まり、私達の家屋の周囲で夜中になるとドンパチが始まり、鉄砲玉が家の中に入らないように畳を窓に立てかけ、朝になり畳を見ると玉が突き刺さっていました。

外に出ると兵器、薬莖が処狭しと散らばっていました。物凄く怖かったです。その後1945年8月9日ソビエト軍により満州一斉侵攻が開始され、新京市の家屋に押し入り、強盗、強奪を繰り返した。私の家にも侵入し、私達の目の前で父親のこめかみに拳銃を突き付けられた時は恐ろしさのあまり、震え上がりました。小学2年生の2学期になり、学校に行くと鉄筋コンクリートの校舎がソビエト軍の爆撃により滅茶苦茶に破壊され教室が無くなっていました。教科書は戦時中の物として処分され、2学期の授業は殆ど無かったと思います。学校には机がなく、首から画板を吊り下げて机の代わりにしていました。日本が戦争に負けたことを知り、それまでと違い満洲人からの襲撃から守るため、集団登校しました。

それから両親と幼い妹2人の5人家族と日本人居留者達と共に満洲を脱出し、日本に向かう放浪の旅路に出発する事になりました。それはいきなり、非日常の世界、いわばこの世の地獄へと突き落とされる始まりでした。母親は2歳児を抱き、各自背中に自分達の身体より大きな荷物を背負い、途方に暮れて歩き続け某駅に到着。客車ならぬ屋根が無い貨車にぎゅうぎゅう詰めに積み込まれ、雨が降れば、テントを張れどもずぶ濡れになり、体調不良になる人も出ました。時々停車して近所の空き家、体育

館等を転々し、元の貨車に戻りながら出港地の葫蘆島に到着しました。それまでの行動中、はぐれた子供たちが残留孤児になったと思います。彼等は引き上げ時の犠牲者です。

港から乗船するのですが、その船は客船ではなくて貨物船で船底生活を余儀なくされました。皆、雑魚寝で丁度、台風、地震等の避難所での生活と同様のあり様です。衛生状態も悪く、栄養失調や病気で亡くなられた方々も大勢居ました。葬儀らしい葬儀もなされず箱状の箱に入れられ、海中に沈められました。水葬です。その光景を実際に見て医学の道に進むことを決意しました。玄海灘の荒海を進み博多港に入港出来、日本への帰国が家族揃って無事出来ました。

下船を待ち受けていたのは頭から全身に噴霧されたDDTでした。博多から熊本の父方の親戚宅にご厄介になり、2~3月滞在しました。学校は当時の熊本男子師範付属小学校2年生のクラスに入学しました。勉強らしい勉強は全くしていないためテストを受けても 周囲の人たちは80点~90点なのに私は60点位でその差の為に落胆していました。当時は食糧難の真最中、サツマイモをわけ合って食べていました。動物園に行きますと生きた動物は皆剥製でした。3~4か月後、叔父叔母に見送られ、蒸気機関車に曳かれた夜行列車で母方の親類のいる沼津に向かいました。途中、朝鮮人のおじさんから大きなおにぎりを戴き、その美味しさは今でも忘れていません。沼津駅に到着し、叔父、叔母、3人の従妹たちの出迎えを受けました。

食糧難の中、一つの屋根の下で住む部屋は異なりますが仲良く過ごしました。住所は沼津市千本緑町にあり、松林を抜けると、遠浅の海水浴場に出ます。夏になると親父から水泳の特訓を受け、泳げる様になりました。運動は苦手でしたが親父のお陰で水泳だけは得意でした。日本に散々迫害され、それでも私達に施した行いを感謝せずにいられません。戦争とは何でしょうか？人を殺し殺され、何の幸せがあるのでしょうか。これだけ犠牲者を生じたのにまだ懲りず、諸悪の法律を閣議決定し、アメリカの言いなりなり、高価な戦争の為に兵器を買いまくり、平和憲法を改悪し、再び戦争への道を進める悪政を絶たせなければなりません。

敗戦前の映画は始めの画面は日の丸を掲げた兵隊達が突撃し終わりの字幕の前は君が代のメロディー。それ故、私は日の丸と天皇を崇拜する君が代は見たくもなく聞きたくもないです。今でもはっきりと記憶に残っているのを述べました。

記憶に間違いがあると思います。戦争体験のお話をしたことは有りますが、文章にしたのは初めてです。今になって思いますと、故郷新京から日本目指して帰国した道中は旧約聖書の出エジプト記と重なる部分がある様に感じ取られます。